
真宗大谷派宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年
立教開宗八百年慶讃事業学術研究助成

「新出史料にもとづく世親浄土思想の基礎研究」研究成果報告書

上野 牧生

2023年12月

謝辞

「真宗大谷派宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業学術研究助成」の研究成果を報告するにあたり、本研究課題「新出史料にもとづく世親浄土思想の基礎研究」をご支援くださった真宗大谷派の関係各位、そして御門徒各位に衷心より謝意を表す。

今般の慶讃事業を機縁として、世親菩薩の浄土思想に新出史料を介して接し、あらためて本願念仏の教えをいただきなおす機会を得た。本研究では、新出サンスクリット史料である世親『普賢行願論』の解読に着手し、次世代にその教えを相続するための基礎研究を行った。

そして本研究の次なる新規課題「世親『普賢行願論』のポタラ宮新出サンスクリット写本研究」を文部科学省・日本学術振興会の科学研究費助成事業に応募したところ、幸いにして採択の運びとなった。本研究の発展形となる新規課題が「科研費」に採択されたことにより、慶讃事業としての学術研究が一過性の単発的研究にとどまることなく、本願念仏の教えをひろく社会に公開するための基盤研究へ進展することとなった。重大な機縁を得たことに身の引き締まる思いである。ここにあらためて、真宗大谷派の関係各位、そして御門徒各位に深甚の謝意を表す。

最後に、慶讃事業学術研究助成にかかる手続きに際して御高配を賜った、元 真宗大谷派宗務所教育部の速水馨、罇迺信 両師、さらには現 教育部の日野隆文、佐々木啓 両師に、御礼申し上げる。文献研究という全く地味な基礎研究に対し、理解を示してくださる方々が教育部におられるという事実が私にとりどれほど心強かったことか。ここに衷心より御礼申し上げる次第である。

2023 年 12 月

上野 牧生

1. 研究成果の概要

本研究は、世親 (Vasubandhu) の『普賢行願論』(**Bhadracaryāpraṇidhāna-nibandhana*) サンスクリット写本の基礎研究である。近年新たに見出されたこの写本は『普賢行願讚』(*Bhadracaryāpraṇidhāna / Bhadracarī*) に対する世親の注釈を内容とする。世親が注釈対象とする『普賢行願讚』とは、十方三世の仏土におわすあらゆる仏・世尊への「誓願」に基づく「普賢行」を主題とする華嚴経典でもあり、極楽におわす阿弥陀仏のもとでの「回向」を主題とする浄土経典でもある。総じて、「普賢行願」(*bhadracaryāpraṇidhāna*) と呼ばれる誓願と、その誓願に基づく普賢行を源とした「回向」(*pariṇāma*) を主題とする。特にその後半部では、かかる誓願に基づく普賢行を実践する者は、必ず「現世において阿弥陀仏に見え」「命終のち極楽世界に往生し」「極楽世界において阿弥陀仏から授記をうけ」「衆生たちが極楽世界に往生するよう自身の徳を回向する」と説かれる。そうした記述は、『大無量寿経』第二十二願(還相回向の願)、および宗祖親鸞聖人『教行信証』における「普賢之徳」の一起源と目されている(幡谷明「大無量寿経における普賢行—親鸞の還相回向論の思想的背景—」『大谷学報』66-4: 1-22, 1985)。世親の『普賢行願論』は、こうした阿弥陀仏浄土を主題とする大乘仏典への散文注釈であり、数多あるインド仏典のなかで最も世親『浄土論』に近いものである。そのため、この新出サンスクリット写本を解読することにより、原典研究の地平から、世親の浄土思想に光を当てることが可能となる。このように本研究は、ひろく本願念仏の教えをうけとめなおすための基礎研究として位置づけられる。

本研究の成果は、概して次の四項にまとめられる。

- (1) サンスクリット写本の全体にわたる翻刻が完了した
- (2) 敦煌文献のなかに平行文献を発見した
- (3) 解読の成果を英文・和文の学術誌にそれぞれ投稿した
- (4) 世親の浄土思想が記された新出史料を社会に公開する土台を形成した

以下、一項ずつその詳細を説明する。

(1) サンスクリット写本の全体にわたる翻刻が完了した

(1.1) 翻刻の概要

世親『普賢行願論』のサンスクリット写本は、現在のところ2種の現存¹が確認される。

¹ 本研究の開始時点では一本の写本(写本Aとする)のみに基づき解読を進めていたが、松田和信教授

双方ともチベット自治区ラサに所蔵されており、その紙焼きが中国・北京の国立研究機関である「中国蔵学研究中心」(China Tibetology Research Center, CTCRC)に保管されている。筆者の所属する大谷大学は CTCRC と学術交流協定を締結しているため、研究許諾を正式に得た上で、その解読に着手した。筆者は、共同研究者である李学竹博士(かつて大谷大学・小川一乗名誉教授のもとで博士号を取得し、現在は CTCRC に所属する仏教学者)と共に、学術研究助成期間内に当該写本の全体に及ぶ翻刻を完了させた。ここに言う「翻刻」(Transliteration)とは、所謂ローマ字転写を指し、写本に記された文字を解読し、そこに一切の修正を加えることなくそのままローマ字に転写する研究作業を指す。具体的に行った作業は、ローマ字転写のみならず、翻刻文に含まれる『普賢行願讚』(全 60 偈)の引用箇所にもマーカーを付しつつ、世親の注釈内容に即してその全体を分節して、写本に記された文字どおりのエディション(Diplomatic Edition)を整備した。この翻刻作業を通して、当該文献の全体構成を確認することができた。

(1.2) 世親『普賢行願論』の全体構成

世親『普賢行願論』は全十節から構成される。具体的には、『普賢行願讚』(60 韻文)の全体が十の主題に沿って分節されており、その全十節に即して世親の散文注釈も分節されている。以下、それぞれの主題に配当される『普賢行願讚』本偈の番号とあわせて、その構成を示す。

- (1) tathāgatavandanā 如来に礼拝すること (vv. 1-4)
- (2) tatpūjanā その方(如来)に供養すること (vv. 5-7)
- (3) atyayadeśanā 罪過を懺悔すること (v. 8)
- (4) puṇyānumodanā 福德を随喜すること (v. 9)
- (5) dharmacakrapravartanādhyeṣaṇā 法輪を転ずるよう勧請すること (v. 10)
- (6) tathāgatāvasthānayācanā 如来が留まるよう要請すること (v. 11)
- (7) kuśalamūlapariṇāmanā 善根を回向すること (v. 12)
- (8) tatprabhedah それ(回向/普賢行願)の分類 (vv. 13-45)
- (9) tanniṣṭhā それ(回向/普賢行願)の究極 (v. 46)
- (10) tadanuśaṃsaḥ それ(回向/普賢行願)の徳性 (vv. 47-60)

(佛敎大学)の情報提供により、別の写本(写本 B とする)を見出すことができた。松田和信教授に御礼申し上げる。

以上のとおり、(1) 如来への礼拝を始点として、(2) 如来への供養、(3) 罪過の懺悔、(4) 福德を得ることの随喜、(5) 転法輪の勧請、(6) 仏在世の要請へと次第する。そして(1) から(6) までの「普賢行」の積み重ねにより張り巡らされた(7) 善根(浄業)を菩提に回向する。かかる七つは、後代には七支無上供養(saptavidhānuttarapūjā)として体系化されるに至る(そのうち、(1)は世親『浄土論』における五念門の第一「礼拝門」と第二「讚歎門」とに少しく共通する)。続いて、(8)(9)(10)ではかかる普賢行を源とする「回向」が主題化される。世親の『普賢行願論』は以上の全十節から構成される。

(2) 敦煌文献のなかに平行文献を発見した

サンスクリット仏教写本の解読に際しては、チベット訳文献や漢訳文献をはじめとする平行文献の探索が重要である。そのため翻刻作業と同時に、平行文献の探索も実施した。そして、所謂「敦煌文献」に平行文献を見出した。

現在、イギリスの大英図書館(British Library)と、フランス国立博物館(Bibliothèque nationale de France)には多数の敦煌文献が所蔵されている。敦煌文献(あるいは敦煌文書ともいう)とは、1900年代に中国・敦煌市の莫高窟の壁中から偶然に発見された文書群の総称である。これら敦煌文献のなかでも敦煌蔵訳文献(チベット訳仏典からなる敦煌写本群)には、『普賢行願讚』のチベット訳写本が数多く含まれている。一方、その数は少ないものの、『普賢行願讚』に対するチベット訳注釈文献が僅かに確認される。なかでも、大英図書館に所蔵される Sir Aurel Stein 蒐集写本(IOL = India Office Library collection)と、フランス国立博物館に所蔵される Paul Pelliot 蒐集写本(PT = Pelliot tibétain)とに、世親『普賢行願論』とほぼ平行するチベット訳の注釈文献を見出した。

Stein Tibetan

IOL Tib J 146 完本

IOL Tib J 148 6 folio のみ。下記 PT 150 の泣き別れ

Pelliot tibétain

PT 150 5 folio のみ。上記 IOL Tib J 148 の泣き別れ

以上の二種(IOL Tib J 146, および IOL Tib J 148 + PT 150)は、サンスクリット文献から翻訳されたチベット訳の注釈を記した敦煌写本である。その文言は、新出サンスクリット写本から回収されるサンスクリット文とおおよそ内容が一致する。そのため、(1)にて完了させた翻刻に基づきサンスクリットテキストを校訂する際に、これらの敦煌文献は有力な平行資料となる。

(3) 解説の成果を英文・和文の学術誌にそれぞれ投稿した

本研究の成果のうち、学術論文として公刊されたものの概要を以下に述べる。かかる成果公開に際して筆者が意識したのは、サンスクリット仏教写本研究の要件ともいえるべき、翻刻 (Transliteration)、サンスクリット校訂テキスト (Sanskrit Edition)、詳細な注解を伴う翻訳 (Annotated Translation) の三点である。この三点の公開を念頭に置きつつ、合計3本の学術論文を公刊した。

(3.1) *China Tibetology* 誌への投稿論文

"Vasubandhu's Commentary on the *Bhadracaryāprāṇidhānarāja*: A Preliminary Transcription" と題して *China Tibetology* 2022 No. 1 に投稿した英語論文 (2022年3月) は、未だ写本Bの発見に至っていない時点における、世親『普賢行願論』の冒頭部 (目次に相当する「要義 piṅdārtha」と、第一節「(1) 如来への礼拝 [第1~第4偈]」) を対象とした写本Aの試験的な翻刻と、『普賢行願讚』に対する数多の注釈文献についての解題からなる。解題では、『普賢行願讚』に対する注釈文献として、チベット大蔵経テンギユル (Bstan 'gyur) に龍樹 (Nāgārjuna)、世親 (Vasubandhu)、陳那 (Dignāga)、嚴賢 (*Bhadrapaṇa / Rgyan bzang po)、称友 (Śākyamitra) による5種類が収録されていること、またチベットにおける各種の翻訳仏典目録に徳光 (Guṇaprabha) による注釈 (現存は確認されていない) が記録されていること、さらにはチベットの仏典翻訳官イエシェデ (Ye shes sde) による備忘録に仏称 (Buddhakīrti) による注釈 (現存は確認されていない) が言及されていること、つまり記録の上では、少なくとも7種の注釈文献が存在したことを論じた。総じて、『普賢行願讚』が古代・中世インドにおける大乘仏教の師たちにとり極めて重要な聖典のひとつであったことを示した。

(3.2) 『仏教学セミナー』誌への投稿論文

続いて、新たに見出された写本Bをも加えた世親『普賢行願論』の冒頭部を対象範囲として、サンスクリット校訂テキストとその和訳を『仏教学セミナー』第117号に投稿した (2023年6月)。「普賢行願讚の梵文注釈—如来への礼拝—」と題したこの日本語論文を執筆する過程で明らかとなったのは、世親『普賢行願論』のテキストに関する興味深い事実である。すなわち、『普賢行願讚』本偈は仏教混交サンスクリット (Buddhist Hybrid Sanskrit) で伝承されているが、かかる本偈が世親の注釈に ityādi-または iti との引用符を伴って引用される場合、中期インド語の語形が維持されている。一方、引用符なくして本偈が言及される場合、古典サンスクリットの語形で言及されている。さらに、本偈がその引用符を伴って中期インド語形で引用される場合にも、従来の『普賢行願讚』諸写本に見

られる仏教混交サンスクリットとはやや異なる語形が記されている。したがってこのサンスクリット写本から、従来の『普賢行願讃』諸写本群とは異なる、あるいは華嚴経・入法界品の諸写本群に見られる本偈とは異なる、新たなテキストを見出すことができる。

言い換えれば、新出サンスクリット写本のこうした言語状況により、当該写本が作成された当時の大乘仏典の一形態を再構成し得るという、大乘経典研究としての側面を本研究は兼ね備えることとなった。

なお、そのテキスト校訂に際しては上記の敦煌チベット訳文献、およびチベット大蔵経テンギルに収録されている各種『普賢行願讃』注釈文献の記述を援用し、その相互関係の把握に努めるとともに、その異動については細かく和訳に注記した。

(3.3) 『大谷学報』誌への投稿論文

続いて、同じく冒頭部を対象とした写本 A・写本 B 両方の翻刻、および敦煌文献に確認される平行資料についての総括を、"The Beginning of the *Bhadracaryā*: Two Sanskrit Manuscripts on the First Section of *Bhadracaryāprāṇidhāna* Commentary" と題して『大谷学報』103-2号に投稿した(2023年9月)。この英語論文では世親『普賢行願論』冒頭部の主題について詳しい序論を付し、注目すべき要点について論じた。すなわち、普賢行

(*bhadracaryā*) の始点に位置づけられる「如来への礼拝」とは、誰よりも先ず、何よりも先ず、あらゆる方角 (*samanta*)、すなわち十方・三世の仏土におわす仏・世尊への礼拝である。ありとあらゆる仏土におわす仏・世尊のひとりひとりに「身業」でもって礼し、法界に仏・世尊が満ちていると「意業」でもって信じ、海の如く限りない仏・世尊の徳性を「語業」でもって讃える。そして、かかる三業による礼拝 (*vandanā*)こそが普賢行のはじまりであること、そうした礼拝を実現するのが普賢行願(普賢行の完遂を目的とする誓願)のはたらき (*vyāpāra*) であることを、一人称の動詞表現で謳いあげる。普賢行を実践する者にとり、仏・世尊は、まさしく現在する。仏・世尊の現在性こそ、『普賢行願讃』の底流である。かかる普賢行としての「如来への礼拝」に際して繰り返し強調されるのは、その礼拝が**ありとあらゆる**仏・世尊を対象とする、という点である。十方・三世のありとあらゆる他方仏土におわす仏・世尊の「ひとりひとり」「残らず全員」に対する礼拝であることを、世親は繰り返し強調する。かかる内容を序論にて論じた。

あくまでその範囲は「冒頭部」に限定されるものの、この英文論文をもって、新出サンスクリット写本の基礎研究におよそ求められる三要件、すなわち翻刻・校訂テキスト・注解を伴った翻訳を、英文・和文双方の解説を付して公開したことになる。以上が、本研究の成果のうち、学術論文として公刊されたものの概要である。

(4) 世親の浄土思想が記された新出史料を社会に公開する土台を形成した

以上のとおり、本慶讃事業学術研究助成の支援を受けて研究の土台を形成した上で、2022年9月に本研究の発展形となる新規研究課題を日本学術振興会・科学研究費助成事業に応募した。幸いにしてこの新規研究課題は「基盤研究(C)」に採択された。採択された研究課題名は「世親『普賢行願論』のポタラ宮新出サンスクリット語写本研究」(JSPS 23K00058)である。

したがって今後は、日本学術振興会・科学研究費助成事業の公的な支援を得て、その研究を継続することになる。以上のとおり、世親の浄土思想が記された新出サンスクリット史料をひろく社会に公開するための土台を、慶讃事業学術研究によって構築した。

2. 慶讃事業としての本研究課題の意義

2.1 『普賢行願讃』の研究前史と、真宗大谷派の教師たち

慶讃事業学術研究助成の「趣旨」において、その助成の願いとは「本願念仏の教えをいただきなおし、次世代に教えを相続すること」の実現に資すること、と明記されている。そして本研究は、インド大乘仏教史のなかで「世親の著述」として伝承されつつも、近代以降の研究者がほとんど参照し得なかった新出サンスクリット写本に光を当て、原典研究の地平から、世親の浄土思想を受けとめなおすことを企図した基礎研究である。同時に、次世代の研究者にも参照され得る基礎資料(翻刻・校訂テキスト・注解を伴った翻訳)の構築を目指したものである。永年の参照に耐え得る基礎研究を完成させることにより、原典研究に基づく浄土思想研究の地平から、本願念仏の教えを受けとめなおしたい。次世代へと継承されるべき世親『普賢行願論』を目に見える形で整理し公開したい。そうした目的を持ち、本研究課題を遂行した。

ここであらためて、慶讃事業としての本研究の意義を説明したい。そのためには、世親が注釈対象とする『普賢行願讃』について説明しなければならない。実は、『普賢行願讃』の先行研究は真宗大谷派の歴代教師と縁が深い。

近代に至り、梵文テキストとしての『普賢行願讃』研究に先鞭をつけたのは、南条文雄師(元大谷大学学長)である。泉芳璟師(元大谷大学教授)によれば、オックスフォード大学に留学中であった南條師が、Max Müller教授より依頼を受け、日本から取り寄せた『大無量寿経』(*Sukhāvāṭīyūha*)をはじめとする梵文写本群のなかに『普賢行願讃』が含まれていた(泉芳璟「南條先生の著書解説」『大谷学報』9-1, 1928, p. 167)。南條師は『普賢行願讃』の梵文写本を解説し、校訂もしていたという(p. 171)。しかし、南條師はMüller教授と共に『大無量寿経』『阿弥陀経』『般若心経』『大孔雀経』の梵文テキストの公表を優先したため、『普賢行願讃』の原典研究を公表することはなかった。その仕事はドイツ・ストラスブルク

大学に留学していた浄土宗の渡辺海旭師に継承され（南條師と渡辺師との間に連絡関係はなかったようである）、渡辺師が自身の博士論文として見事に成し遂げた（Watanabe Kaikioku, *Die Bhadracarī, eine Probe buddhistisch-religiöser Lyrik, untersucht und herausgegeben*. Leipzig: Kreysing, 1912）。

以上は約 60 の韻文からなる『普賢行願讚』単独写本に関する先行研究である。こうした単独写本とは別に、『普賢行願讚』は『華嚴経・入法界品』（*Gaṇḍavyūha*）の最後部に編み込まれてもいる。すなわち『華嚴経・入法界品』の末尾には『普賢行願讚』の全韻文が編入されており、『普賢行願讚』でもってその棹尾を飾る形態を有するのがインド仏教文献としての『華嚴経・入法界品』である。そして、そうした『華嚴経』を総体的に研究したのが鈴木大拙師（元大谷大学教授）である。鈴木師は講演や学会などで欧州に招聘された際、各地で『華嚴経・入法界品』の梵文写本を集め、また日本国内に所蔵されていたものも含め 6 本の梵文写本を蒐集した。そして鈴木師は泉芳璟師、須佐晋龍師らと共に校訂を進め（あるいは彼らに校訂作業を託し）、かつて南條師が 1923 年に『入楞伽経』（*Laṅkāvatāra*）をデーヴァナーガリー文字で出版した際の金属鋳型を用いて、『華嚴経・入法界品』の梵文テキストを出版した（Suzuki Daisetz Teitaro, Idzumi Hokei, *The Gaṇḍavyūha sūtra*. Kyoto: The Sanskrit Buddhist Texts Publishing Society, 1934-36）。本書の出版に至る途上の、デーヴァナーガリー文字の困難な植字組版の様子が泉師によって紹介されている（「梵蔵學研究室工場」『マユウラ』第 2 号、1933, pp. 69-70）。大谷大学の西側、「銃剣道の道場と銃器庫」の間に「梵蔵學研究室附属工場」が設けられ、その工場で梵文『華嚴経・入法界品』の困難な植字組版がなされた様子が詳細に記されている。そうした大変な苦勞の末に出版に至った『華嚴経・入法界品』の梵文テキストであったが、校訂テキストとして一般的なローマ字表記ではなく、デーヴァナーガリー文字による出版にこだわったゆえに、南條師の『梵文入楞伽経』と同様、数多の誤植や脱落を招く結果となった（龍山章真師（元大谷大学教授）による書評「D.T. Suzuki, & H. Idzumi (Editors) *The Gaṇḍavyūha Sūtra* (Pts. I & II) Kyoto, 1934」『大谷学報』16-2: 169-170, 1935）。

その後、かねてより『普賢行願讚』に強い関心を抱いていた泉芳璟師は、先の困難なデーヴァナーガリー植字組版を経て出版された鈴木・泉『梵文華嚴経』（Suzuki-Idzumi 1934-36）に含まれる『普賢行願讚』が、そのテキストに多くの誤りを含んだまま（泉師の出した訂正案が反映されないまま）出版に至ってしまったとして、その誤りを訂正すべく、単著として『普賢行願讚』の梵文テキスト（漢訳対照）・英訳・和訳を矢継ぎ早に出版した（泉芳璟「梵文普賢行願讚」『大谷学報』10-2: 152-208（1929）；"The Hymn on the Life and Vows of Samantabhadra." *The Eastern Buddhist* 5-2&3: 226-247（1930）；「梵文邦訳普賢行願讚」『マユウラ』2: 11-15（1933））。

泉師の没後、鈴木師は Suzuki-Idzumi 1934-36 の誤記と脱落を補うべく、その改訂版を出版した (Suzuki Daisetz Teitaro, Idzumi Hokei, *The Gaṇḍavyūha sūtra*. New Revised Edition. Tokyo: Society for the Publication of Sacred Books of the World, 1949)。しかし、わずかに数点の脱落が補われたのみで、それでもなおテキストの修訂は不十分であった。

そのため、山口益師を介して、鈴木大拙師からの委嘱を受けた長谷岡一也師 (1924年2月11日 - 2021年8月21日) が、その半生を捧げて2020年に『華嚴経・入法界品』の梵蔵漢索引と Suzuki-Idzumi 1934-36 の修訂を完成させた (長谷岡一也『華嚴経入法界品梵蔵漢対照索引』京都:法蔵館、2020)。長谷岡師は本書において、『華嚴経・入法界品』の Sanskrit-Tibetan-Chinese Index と、Sanskrit Text (Suzuki-Idzumi 1934-36) の Corrigenda を公刊した。本書は全三巻から成る巨冊であり、vols. 1-2 の Index は、Sanskrit の見出語を Suzuki-Idzumi 1934-36 から (Suzuki-Idzumi Ed.の初版、4 parts の三冊本。ただし誤りの多い Suzuki-Idzumi Ed.の文言を訂正した上で Index に採録)、Tibetan を大谷大学図書館所蔵の北京版 P. no. 761 sangs rgye phal po che から (ただし北京版の読みに誤りがある場合はデルゲ版の読みを併記)、Chinese を大正新修大蔵経の『六十華嚴』(T. 0278)、『八十華嚴』(T. 0279)、『四十華嚴』(T. 0293) の他5経典から採録する。全て見出し語に対応する頁数と行数が記載され、それぞれチベット訳・漢訳の対応訳語が付いている。そして Vol. 3 の Corrigenda は Suzuki-Idzumi 1934-36 の修訂 (訂正案) を提示する。長谷岡師は、半世紀以上の歳月をかけて Index と Corrigenda を完成させた。いわば長谷岡師はその後半生を『華嚴経』の研究に捧げ、鈴木大拙師と山口益師の委嘱に応えたのである²。

本研究は、真宗大谷派のこうした歴代教師による諸研究の延長線上に位置づけられる。

2.2 第二十二願 (還相回向の願) - 宗祖親鸞聖人における「普賢之徳」 -

先述のとおり、『普賢行願讃』の後半部は「回向」を主題とし、またそれが『大無量寿経』第二十二願の前提と目されている (幡谷明「大無量寿経における普賢行」)。宗祖は『浄土和讃』『高僧和讃』『浄土文類聚鈔』『唯信鈔文意』にて還相回向を「普賢之徳」と言明する。特に『教行信証』では、

しかれば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。すなわち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵ふなり、知るべし、と。(真宗聖典 192 頁)

と確かめられている。宗祖が言明する「普賢之徳」は、『大無量寿経』第二十二願の、

² 長谷岡一也師の後半生については、御令嬢である長谷岡範子氏に詳しく伺った。今般の慶讃事業を通して長谷岡範子氏との知遇を得て以降、氏には様々な形で筆者の研究をご支援いただいている。長谷岡範子氏に御礼申し上げる。

たとい我、仏を得んに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生して、究竟して必ず一生補處に至らん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆえに、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の國に遊んで、菩薩の行を修し、十方の諸仏如來を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立せしめんをば除かん。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もし爾らずんば、正覺を取らじ（眞宗聖典 18-19 頁）

に基づくものである。宗祖は大經に基づき、浄土に往生した菩薩による回向（普賢行願）の本質を「徳」と了解され、それをこそ還相回向のはたらきと受けとめたのである。この第二十二願の、サンスクリット本に基づく藤田宏達師の和訳は以下のとおりである（サンスクリット原典では第二十一願にあたる）。

（二一）もしも、世尊よ、わたくしが覺りを得たときに、かしの仏國土に生まれた者となるであろう衆生たちが、——大いなる鎧を身にまとい、一切の世間の利益のために専心し、一切の世間を般涅槃せしめるために専心し、一切の世界において菩薩の行を実践しようとして欲し、一切の仏たちを尊崇しようとして欲し、ガンジス河の砂に等しい衆生たちを無上なる正等覺に安立させ、さらにその上の行に向い、サマンタパドラ（普賢）の行に決定しているこれら菩薩・大士たちの、特別な諸誓願〔がある場合〕を除いて——すべて、無上なる正等覺に向けて、一生だけ〔ここに〕つながれた者（一生所繫）とならないようであるならば、その限り、わたくしは無上なる正等覺をさとりません。

（藤田宏達『新訂 梵文和訳 無量壽經・阿彌陀經』京都：法藏館、2015, 79 頁）

サンスクリット本に見られる「サマンタパドラ（普賢）の行に決定しているこれら菩薩・大士たちの、特別な諸誓願」（*prañihānaviśeṣāṃs teṣāṃ eva bodhisattvānām mahāsattvānām samantabhadracaryā-niyātānām/niryātānām*）こそ、『普賢行願讚』に明示されている普賢行願にほかならない。「還相回向の願」とも呼ばれる『大無量壽經』第二十二願、および宗祖親鸞聖人『教行信証』における「普賢之徳」の背景には、このように『普賢行願讚』がある。

そして、こうした「回向」を課題とするのが『普賢行願讚』後半部である。なかでも第 49, 57, 59, 62 の四偈は阿彌陀仏浄土について明言し、誓願に基づく普賢行を実践する者は、必ず「現世において阿彌陀仏に見え」「命終ののち極樂世界に往生し」「極樂世界において阿彌陀仏から授記をうけ」「衆生が極樂世界に往生するよう自身の徳を回向する」と説かれている。世親の『普賢行願論』はこうした阿彌陀仏浄土に対する注釈であるため、本研究は、世親浄土思想の研究、ひいてはインド仏教浄土思想研究全般に向けて、新たなサンスクリット史料を提供することになる。

付記（書誌情報）

Li Xuezhu / Ueno Makio

2022 "Vasubandhu's Commentary on the *Bhadracaryāprañidhānarāja*: A Preliminary Transcription," *China Tibetology* 2022 March No. 1: 33-47.

上野 牧生・李 学竹

2023 「普賢行願讚の梵文注釈－如来への礼拝－」『仏教学セミナー』117: 1-34.

Ueno Makio / Li Xuezhu

2024 "The Beginning of the *Bhadracaryā*: Two Sanskrit Manuscripts on the First Section of *Bhadracaryāprañidhāna* Commentary," 『大谷学報』103-2. (掲載予定)

以上